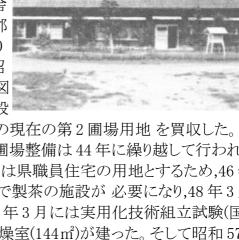
(1)生比奈柑橘栽培試験地 生比奈柑橘栽培試験地は、昭和8年に開設して以来、戦前戦後を通じて建物の新、改築も圃場の増減もな かった。試験は園芸部主任の桂技師が開設当初からこれを担当していた。しかし常駐ではなかったため平 常における園の管理は常農夫に任されていた。戦後になって昭和24年に生比奈柑橘試験地と改称され,同 年 11 月に甚上技師が発令され桂技師と交替した。甚上技師は園芸部の所属であったが柑橘園の専任とし て常駐し、常農夫と共に柑橘の系統選抜、適品種の試験、柚、キコクなどの砧木試験、肥料および剪定などの試 験を行なった。また本場の病虫部ではこの柑橘園に出向いてミカン害虫の天敵の増植やヤノネカイガラムシ の防除試験などを行った。しかし、戦後における柑橘をはじめとする果樹類の栽培面積の急増は、この方面の 高度で且つ組織的な試験研究体制を望むところとなり,昭和28年6月に果樹試験場建設3か年計画が県 議会に上程され,承認された。そして,生比奈柑橘園と対面する勝浦川南岸斜面に新しい地を求めて29年4 月から敷地,園地の整備および庁舎などの建設が開始された。こうして翌30年果樹試験場が開設されるに及 んで生比奈柑橘園は大山果樹園と共に,業務施設をこれに移管した。当時の柑橘園は現在も試験園として 使用されている。

2.分場•試験地

(2) 池田分場 ① 用地,施設および職員 徳島県西部には従来葉タバコ阿波種が栽培されていたが、戦後昭和

24・25年頃から阿波薬タバコの需要減による先行不安から、これを黄 色種に替える方針が 立てられ,昭和26年に黄色種栽培技術の習得 を重点に、中堅タバコ耕作者の養成を目的とした徳島県タバコ耕作技 術員養成所が分場内に併設され,昭和33年には教室を含む寄宿舎 1棟(50坪)が建てられた。建設予算は150万円で,うち半分は三好郡 各町村およびタバコ耕作組合の負担によるものであった。そして40 年には鉄骨ファイロン張りのタバコ育苗,乾燥室(54.9㎡)も建った。昭 和43年には山間傾斜畑の生産性の向上による山間農業の振興を図 る名目で,主として緑茶に関する試験研究を行なうための茶園を開設 するために、8戸に係わる民有地と神社有地(元国有地)計10,375㎡の現在の第2圃場用地を買収した。しか し買収交渉が難行して売買契約が3月27日にずれ込んだために,圃場整備は44年に繰り越して行われた。 なお第2圃場開設との絡みで、分場への上り口にあった水田924㎡は県職員住宅の用地とするため、46年6 月に管財課へ移管した。新植した約1分の茶園が成園となるに及んで製茶の施設が必要になり、48年3月に

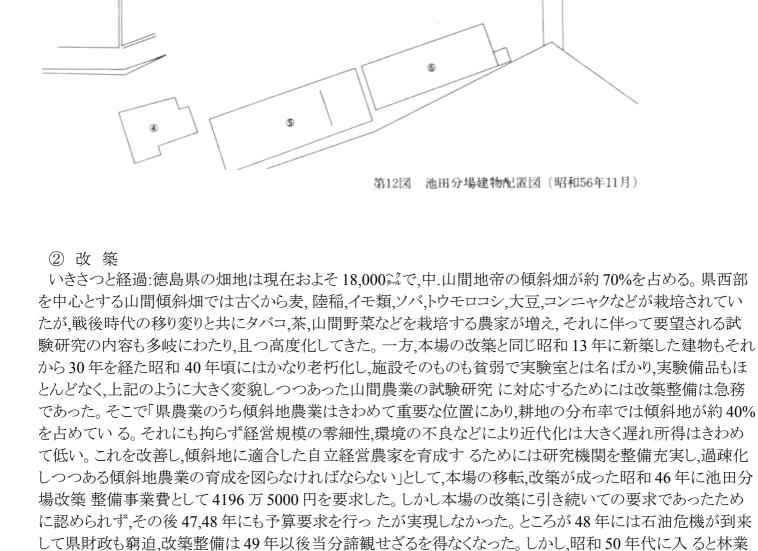


県単事業で製茶機と製茶実験室(86㎡)1棟が建設された。さらに49年3月には実用化技術組立試験(国補) の施設費で、収納兼作業舎(216㎡)およびファイロン張りのタバコ乾燥室(144㎡)が建った。そして昭和57年 には本館(472.5㎡),作業舎(147㎡)およびガラス室(48㎡)が改築整備された。改築前における建物の配置は 下図のとおりである。 池田分場の研究の中心は、開設以来久しく、麦、サツマイモ、大豆など畑作物が中心であったが、戦後の農業 事勢の変化に対応して、26年からはタバコ耕作技術員の養成を併わせてこれの研究にも着手した。44年に は茶園を造成し、間もなく緑茶の栽培、加工試験が加わった。タバコの研究は地域における栽培面積の減少 に伴って減り,技術組立実証試験の終了した52年を最後に,53年からはタバコ用農薬の委託試験を残すの みとなった。他方野菜の研究が48年から始まり、研究課題もその後急増し、現在は山間野菜と緑茶の研究を 2 つの柱として大豆,ソバなど,畑作物の研究も併わせて実施している。

戦後における分場職員の動きは下表のとおりで主任および,分場長は土井建治郎,桑野正信,天野晃,真渕 昭雄,山口重雄,森本栄,川人浩氏らが入れ替った。 第8表 戦後における池田分場の職員数の変動 25 28 37 39 23 30 33 46 53 55 32 45 20 21 22 年 次  $\sim$ 24  $\sim$ 27  $\sim$ 29  $\sim$ 31 ~36  $\sim$ 44  $\sim$ 52  $\sim$ 58  $\sim$ 38  $\sim$ 54 4 5 4 2 3 4 6 4 4 5 4

4(1) 2(1) 3(1) 3(1) 研究職 行政職 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 技能職 1 3 5 4 5 7 5(1) 3(1) 4(1) 5(1) 6 5 6 5 6 5 計

/				
0		2		
	①本館(研究室・実験室)	96.0m <sup>c</sup>		
	②作業含	112.4m²		
	③寄宿舍	165.3m²		
30	<b>⊕</b> 2: ↑	59 . 5m²		
	⑤作業含·収納含·介庫	216.0m²	8	



天に恵まれて暖かかったために工事は順調に捗り、2月にはまず作業室が、続いてガラス室が完成し、仮事務 室を作業室の一隅に再び移した。本館工事は当初の予定より1旬ほど遅れたが3月中旬には完了し,同月 23 日に竣工検査が行われた。改築工事決算額は 9,939 万円で,施工業者およびその内訳は下のとおりであ る。建物に重点を置いたため備品費は圧縮されたが,長年渇望していた少量製茶機346万円は設置された。 57 年度 池田分場改築工事決算(予算額 100,000 千円) 〇工 事 費 88,305 千円 本館,作業舎,ガラス室建築 旧建物撤去工事 丸浦工業 K.K. 池 田 町 69,900千円 坂 本 電 気 商会 事 池 田 町 8,850千円 管 事 浜 設 備 K.K. 山 川 町 5,000千円 空 事 (有)木下水道工業 町 4,555千円 調工 脇 〇設 計 委 託 (有) 卓建築設計事務所 徳島市城ノ内 2,580 千円

静岡県金谷町 3,460千円

3,745 千円

**役務費** 150 千円

99,390 千円

総合技術センター,畜産試験場,果樹試験場など県内農林関係専門場所の改築が相ついで行われ,これが終

そこで月曜会(本場管理職および総務課長の週定例会)では年が明けた57年4月5日に早速改築整備の 推進メンバーとして場長、各次長、宮田総務課長、野村庶務係長および同分場の研究員を決め、中でも阿部、川 人両次長と総務課長が中心となり,主管課の直接担当者である新見庶務係長らと緊密な連絡をとりながら整 備事業を具体的に進めた。そして5月中旬には試験場としての設計案ができ上り、同25日に営繕課との打合 わせが行われた。6月5日には関係者が池田分場に集まり、現場に立ち合いながら第3回目の打ち合わせを 行った。建築設計は卓建築設計事務所が請け負い、8月には設計書はでき上っていたが、9月に入って車椅 子出入りのための玄関入口のスロープや便所など設計の一部手直しを行った。こうした理由で予定よりかなり

作業室完成までの当分の事務室として寄宿舎の一部を残して本館,作業舎,寄宿舎などの撤去がそれから 間もなく始まり、10月27日には午前11時から関係者が集まって地鎮祭がとり行われた。この冬は比較的好

了した57年度に漸く総額1億円の改築整備費が認められた。

〇備 品 費

〇事 務 費

合 計

少量製茶機

中央実験台他

旅費 200千円

修室で落成式が行われた。

寺田製作所

**需用費** 950 **千円** 

遅れていた入札も10月12日に行われ、建築工事は地元の丸浦工業が落札した。

整備後の建物および本館各室の配置図は次に示したとおりで,本館は1階に研究室と実験室を配置し,2階 は研究室および資料室とした。研究室は外部の農業関係者の利用にも配意して60~70人収容できる広さと し、それに応じて駐車場もできるだけ広くとった。本館の外観については洋風でなく、山間の分場に相応しい 建物を希望していたが、完成した庁舎は近代的な一見和風の建築で、背景の山の緑ともよく調和している。因 みにこれを設計した若手設計士原政仁氏は57年度県設計コンクールで最優秀賞に輝いた。 昭和46年に改築予算を要求してから12年、古い分場からみると内容も外装も一新され隔世の感がする新し い本館に分場職員一同が引越したのは大安吉日の3月30日であった。 4月から5月にかけて、残されていた庭園の整備を行ったが、昭和13年の開設以来育って来た前庭の梅、楓、

椿の古木や裏庭の木犀などはそのまま残した。なおロータリーに立つ記念碑に刻まれた「緑風」の文字は、緑

落成式:外周りの庭の整備,内部の整備も終わり,多忙な一番茶の摘み取りも一段落した6月9日に,本館研

南米外遊中のため出席できなかった三木知事の代理の小島副知事をはじめとして鳥山四国農試場長、地 元県議会議員,三好,美馬郡内町村長,農協組合長,農林水産部関係部課長,同出先機関長その他関係者約 60名が出席した。開式の辞に続いて副知事が「時代に即応した試験研究を進めるためにこのたび池田分場 を 改築し、施設や実験機具を整備した。 今後これらを十分に活用して山間地域農業に役立つ立派な成果を 挙げたい。また研究施設も整えたのでご利用いただきたい」と知事式辞を述べ、続いて近藤営繕課長が工事

の山、風も爽やかなこの地に山間農業振興の技術の新風を期待してのものである。

経過を報告,建築に功労のあった丸浦工業(株),坂本電気商会,浜設備(株),木下水道工業の5社に感謝状が 贈呈された。そのあと来賓の四国農試鳥山場長および地元池田町の真鍋町長が祝辞を述べ,正午前に式を 閉じた。 改築後の建物と圃場の配置図および本館平面図は次のとおりである。 ①本 館(延) 472.6m² 186.3m² ②製茶実験室 118.5m<sup>t</sup> ③作業室

48.0m<sup>2</sup>

143.5m<sup>2</sup>

216.0m<sup>2</sup>

④ガラス室 ⑤乾燥室

⑥収納舎·倉庫

第13図 池田分場建物圃場配置図(昭和58年3月)

玄 関

更衣室

休憩室

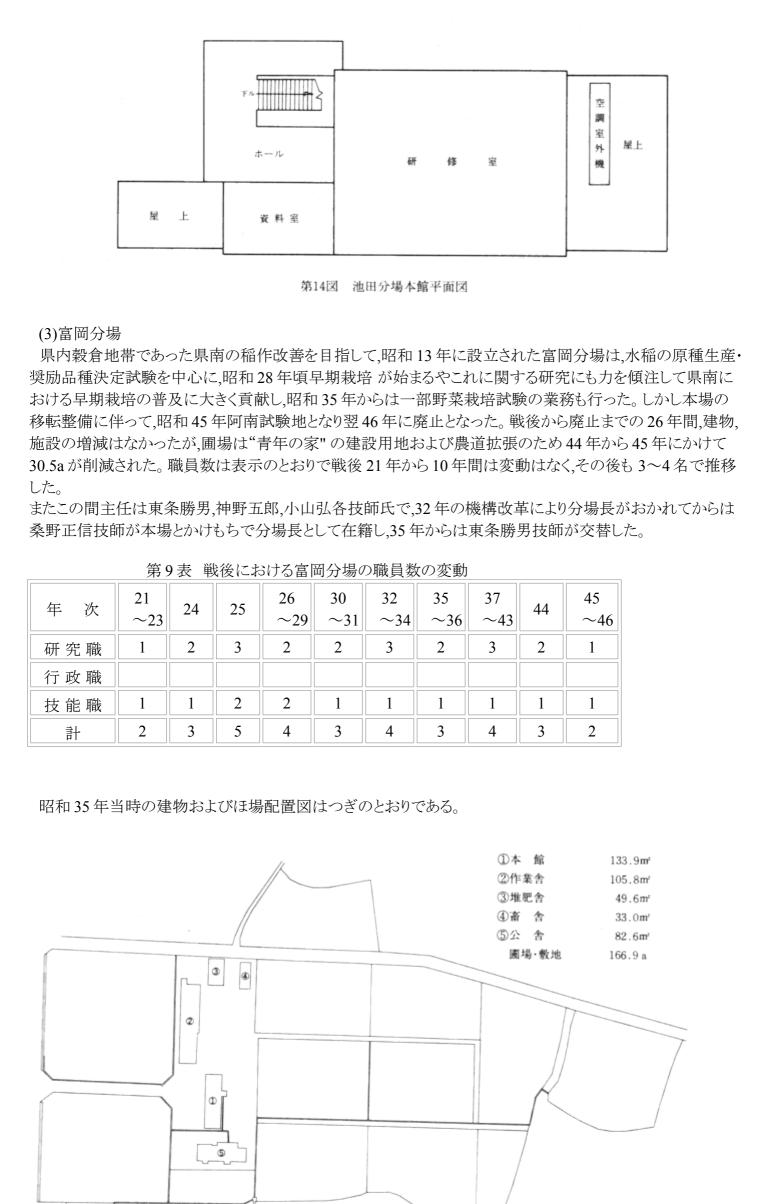
玄関

便所

便所

便所

四国共立病院



用地 敷地 8畝 果樹園 3 町 施 設 (うち国有地 6 反 3 畝, 県有地 2 町 4 反 5 畝) 平屋建 瓦葺 15.0坪 収納舎 農具舎 5.0 " 牛 舎 4.5" 便 所 2.0"

開設当時の職員は技師2,助手3,常農夫1の計6名で,主任は鈴江昇技師であったが翌年4月には異動に よって下楠技師が交替し、職員数は5名となった。その後25~27年の3年間は研究員5名、技能職1名の計 6名に増えたが28,29年には再び5名となった。果樹園はそのまま引き継がれたが,前述のように廃園同様の 状態であったので 1,2 年は園の回生に全精力が傾注された。しかし戦後間もない頃のことで、トラクタやハン マーカルチなどの農業機械はもとよりなく、肥料、農薬も乏しく園の復興は並大抵の苦労ではなかった。そのう え経常経費と同額の30万円の財収をあげるように指示されていたために、生産される果樹の販売額では追 つかず夏はサツマイモ、冬は小麦を栽培してその販売収益をあげるなど実験どころではなかった。しかし、職員 の涙ぐましい努力によって 荒廃していた果樹園も2年後にはある程度かたちが整い,25年から曲りなりにもカ キの楠蕾,摘果,施肥や害虫防除の実験に着手することができた。果樹園復 興に対する職員のこうした努力は

果樹園はその後も年を追って整備され、28年にはブドウも栽植されて、試験研究も本格的に行われるように

された県では、阿波郡久勝町森沢の地に旧農民道場の施設、圃場をそのまま引き継いで24年秋久勝原種圃 を開設した。そして同年10月に麻植郡西地区指導農場から川真田芳樹技師が着任、早速麦の種播きを行っ た。年が明けた25年の早春,阿部邦一知事,松浦教育長らが出席して開場式が行われ,同年の夏作から左式 に業務が開始された。前述のように主任には川真田技師が任命され、他に作業員および臨時職員の3名で スタートした。職員の数は30年に研究員が1名増えて3名に、40年には作業員が欠員となって1名になった こともあったが、その他の年は研究員および作業員各1名であった。しかし昭和30年代中頃までは臨時職員

昭和32年には町村合併によって阿波原種農場と改称し、原種生産のみでなく、地域に対応した栽培試験も 行ってきたが、本場の石井町移転が決まり、圃場の整備が完了した昭和44年3月に業務を本場に移して廃止

事務室

(5)作業室・浴室

44.6m 64.4mi 99.1m 29.7m<sup>2</sup>

39.6m

の採用もあってこれを含めた職員数が多い時には4名になったこともあった。

昭和35年当時における建物および圃場の状況は次のとおりである。

なったが、昭和30年4月果樹試験場の開設に伴って生比奈柑橘試験地と共に同試験場へ移管された。

第15図 富岡分場建物圃場配置図(昭和35年8月)阿南市富岡町

の樹と丈を競い,カイガラムシなどの害虫 が繁殖して廃園に近い有様であった。

てられた。施設および用地の状況はつぎのとおりである。

28.0 "

昭和24年度の知事表彰として報いられた。

戦前から第2次世界大戦中にかけ,農村青少 年を対象に農業技術や農業経営技術の伝習を 通じて心身を鍛練し,質実剛健の気風を養うこと を目的として実践的 な教育を行っていた阿波 郡久勝町の農民道場は大戦末期に修練農場と して、板野郡板東町に移され、そのあとは戦後も いまらく放任のままであった。しかし、久勝町の 地元では折角の建物や圃場をこのまま廃れさせ るには忍びず有意義な利用の方法を協議して いた。その結果、阿波郡は従来から水稲や麦の 採種に適し,種 子を生産している農家も多いこと から、栽培技術指導も兼ねた原種農場の誘致を 決め、これを県に働きかけた。地元の熱意に動か

(5)阿波原種農場

された。

<大山果樹試験地の用地および施設>

公 舎

戦後間もない昭和23年2月,定例県議会において農業試験場大山果樹試験地の議案が上程された。この 時の議案書は「大山村に果樹試験場の新設費百四十余 万円、果樹振興費六十四万円を計上し、落葉果樹を 初め広く果樹の増産指導を図らんと致しました・・・」と説明している。そしてこの議案は可決され,同年4月に板 野郡大山村神宅字東山の地に大山果樹試験地が開設された。試験地の用地は,昭和7・8年頃不況の底に 喘いでいた農村の更生対策として、農林省が助成し、地元の実業家中川新作氏が昭和9年から10年にかけ て開墾,開園された果樹園であった。しかし中川氏が情熱を傾けて拓いた果樹園も,戦中は人手不足に加え て肥料,農業などの資材も不足したためほとんど放任の状態が続き,やがてススキ,チガヤが園を覆い,松はカキ

試験地は敷地が約1反歩,園地が約3町歩で,うち富有,横野,愛宕などのカキ園が約2.5町歩,クリ園(銀寄) が 0.2 町歩で他は採草地であった。建物は北面の傾斜地を伐り拓いて 15 坪程の事務室兼用の収納舎が建

(4)大山果樹試験地

11.6m 35.8 a

ては、鮎喰町に在った農事試験場を米麦中心の試験場とし、蔬菜部門を切り離してこれを同村に誘致しようと するものであった。そこで時の県政の実力者生田宏一、太田弥三郎県議らにその意を伝えて協力を依頼する と共に阿部邦一知事に意見を具申して理解を求めた。しかし、当時はなお食糧増産第一主義、米麦中心の時 代であり、蔬菜試験場を分離独立さすと言った意見は一顧だにされなかった。そこで蔬菜部門の分離独立は 諦め,新しく蔬菜試験地の設置を求める方針に切り替えてこれを強く推し進めた。 昭和26年10月22日付の農事試験場園芸試験地の設置に関する陳情書(草案)は「・・・・・・由来本郡にお ける蔬菜の栽培は県下の大半を占め、之が経営の如何は直ちに農家経済の上に重大なる影響を与えるもの にして、現在延面積約千参百町歩に及び今後主食の統制緩和に伴い益々激増する傾向にあり、且つ又本部 が往年より蔬菜の名産地であるため其の数量に於いて,又品質に於いて全国的に相当声価を博しつつある状

藍園試験地は発足して5年後の昭和32年2月1日に,藍住試験地と改称(県規則第3号)。さらに38年7 月1日に藍住分場と名称を変えた(県規則第59号)。 年次別職員数は下表のとおりで、多い時には5名になったこともあったが、普通3~4名であった。

43

 $\sim$ 44

2

1

3

45

1

1

2

36

3

1

4

 $\sim$ 42

廃止になった。 (7)藍住分場 ることを夢み,村長就任の初仕事として同村内に蔬菜の研究指導機関の誘致を決意した。当初の考え方とし 態であるが,現在の栽培技術と経営形態について 考える時,従来改善の跡が大して認められず,且つ研究の 機会も少なく旧態依然としている部面もあるので,将来本郡の園芸技術の向上と経営の改善を図るため,此際 蔬菜,花卉を主体とした県農事試験場園芸試験地を板野郡に設置されるよう要望する所以であります」と述べ ている。 同村では試験地誘致について関係者に強く働きかける一方、試験地用地を村で買収し、これを県に無償貸 与することを条件として漸く設置に漕ぎつけ、昭和27年6月、板野郡藍住町東中富朏傍示30番地の1の地 に、農事試験場藍園試験地が誕生10月からはダイコンの播き付けなどの業務が開始された。 落成式は同年12月1日午前10時から,阿部邦一知事(代理),川真田県議会議長,佐野副議長,久次米議 員,地元徳元村長らをはじめ郡内町村長,農協組 合長,村内関係者および県内関係者東郷総務部長,川松経 済部長ら約160名が出席して盛大に行われた。黒田場長の式辞に継いて工事の経過報告、そして用地提供 者6名と用地買収、幹旋に協力のあった佐竹弥平、高橋久米太郎両氏に感謝状が贈呈された。このあと知事 告辞および来賓祝辞があり、富岡芳雄主任の挨拶をもって式を閉じた。 「徳島県立農事試験場藍園蔬菜試験地の工成り本日の佳辰を卜して県知事殿を初め,多数有志諸賢の御

第16図 阿波原種農場建物圃場配置図(昭和35年10月)阿波郡阿波町森沢26番地 (6)板東園芸試験地 板東園芸試験地は、昭和27年3月に廃止となった経営伝習農場の施設、山林、圃場などを引き継ぎ、主として 果樹栽培に関する試験研究を目的として,同年4月に当時の板野郡板東町広塚34番地に発足した。前身が 教育的な機関の伝習農場であったため建物、施設は多く、畑・山林・原野など用地も広かった。 この試験地では一部に桃の苗木を栽植したもののその後の要望により,飼料作物の原種採種が主要な業務 となり、ヒマワリ、ソルゴー(ロゾク)、パールミレット、デントコーン、スーダングラス、イタリアンライグラス、オーチャード グラス,ブロームグラス,プレリーグラスなどの採種を行った。職員の数は,開 設当初は豊田壮逸技師ら研究員 ばかり4名で、同年9月には普及所から多田貞市技師が赴任してきて5名となったが、翌年には再び4名に なった。しかしその後間もなく、徳島市沖洲町に在った少年補導更生施設の徳島学院が敷地、施設が狭くなり 適当な場所を求めていたところ、敷地も広くかつての伝習農場として教育的な施設も備えていた当試験地が 着目されるところとなった。当試験地は、大山果樹試験地や藍園蔬菜試験地とちがって、施設の暫定利用の感 がないでもなかったようで、現実にも飼料作物の採種と圃場の一般管理に追われて、試験研究の場としては程 遠い状態にあったために,同学院の要望に応じて明け渡すことになり,昭和29年3月,開設わずか2年にして 吉野川下流の板野郡地方は地味肥沃で、藩政時代から阿波藍の栽培が盛んであったが、明治末期化学染 料の発達と共に次第に衰微した。これに代わる作物として野菜が導入され,阪神市場を控えて蔬菜産地とし ての名声を高めつつあった。第2次世界大戦中は稲、麦、サツマイモなど主要食糧の生産に転換せざるを得な かったが、戦後食糧難の緩和と共に再び野菜栽培の気運が高まり、栽培面積は急速に拡大していった。しかし 品種や栽培技術の面で立ち遅れ、将来への危機感が生じてきたため、その対策として当時の藍園村を中心 に、野菜の試験研究機関を誘致しようとする動きがでてきた。 当時30才の若さで公選2代目の藍園村の村長 となった徳元四郎氏はこれをうけて肥沃な土地と立地条件に恵まれた同村を県下一の園芸農村に育て上げ

臨席を仰ぎ、茲に開場祝賀の式典を挙行せられますことは、私の最も欣びと感激に堪えない処であります。 本地方は吉野川が営々と築いた一大平野でありまして,地味肥沃の地として総ての農作物に適し殊に特殊 作物は、藩政時代依り巷間に認められ、其の代表的作物として阿波藍が取り上げられ、全盛時代には阿波藩の 財政を左右したとも言われて居ります。然しながら時代の変遷と共に移り変り第一次欧洲大戦を境として 大き な変化を来たし、化学染料の発達と共に衰微の一途を辿らざるを得なかったのであります。之に代るべき作物 として蔬菜園芸の栽培が取り入れられ、農民は価格の暴落病虫害の発生等幾多の苦難を味いつつも品種の 改良栽培技術の研究に、寝食を忘れて没頭し或る程度の成功を見、全盛期に於ては本県出荷量は阪神市場 入荷の七割を占むる大量生産に迄発展を致し、農家経済の安定を来たして参りましたのでありますが、支那事 変、大東亜戦争と国内情勢も大きく変化し、之等の特殊作物は国策に順応して殆んど米麦雑穀等の主食作物 栽培に転換せざるの己むなきに至ったのであります。 殊に本村を中心とする板野地方は畑作地帯であり、終戦後主食の緩和に伴い、蔬菜栽培に遂次転換しつ> ありますが,何分にも長い期間に亘り戦争に依る空白 は品種においても栽培技術に於ても他県に立遅れの感 が深く、此の儘では本県蔬菜園芸作物の前途は全く危懼すべきものがあります。近時農村恐慌を叫ばれて居 ります秋換金作物の発展を図り、多角形農法を取り入れ農家経済の安定を図ることこそ目下の急務であろうと 思考されますのに、現状の儘では旧態依然とした栽培方法を取り、品種に於ても他県に率先する事が出来ず、 従って消費者の嗜好に合わず進歩発展は到底望めない状態でありましたので,関係者一同これが打開策と して品種の改良栽培技術の向進に伴う試験場の設置を念願致して居りました処,県知事殿を初め農事試験場 関係者の深き御理解と地元県議会議員並びに関係者 各位の御努力御援助に依り、ここに立派な試験地の開 場を見ました事は吾々村民一同待望久しかっただけにこの上ない喜びに堪えません。 本試験地設立によりまして今後は、品種の改良に病虫害の防除等に昔日の憂はなく、飛躍的改良発展をもた らす事は期して俟つべきものがあると信じて止みません。特に本地方の受くる利便は甚大なるものがありまし

て、関係当局の御努力関係者の御協力御尽力に対して深甚なる感謝を奉げると共に、本試験地の完成を 契 機として蔬菜園芸を通じ益々地方産業、経済文化の発展に寄与致し度いと念願致して居ります。尚設立当初 に於きましては致底望むべくもありませんが、現在の試験地は圃場の規模内容設備も未だ未だ充分とは考え られませんので将来に於きましては此れ等の設備内容拡充に格別の御高配を御願い致し度いのであります。 最後に本試験地設置に対し、関係町村並に用地関係者の御援助を得ましたことを併せて御礼申上げ御挨 拶と致します。 昭和二十七年十二月一日 藍園村長 徳元 四郎」 設立当時の試験地は総面積1町2畝2坪で,うち圃場が7反4畝6坪,建物は本館(17.5坪),畜舎併設収納 舎(28.0 坪)それに公舎(15.0 坪)でガラス室はそれから少し遅れて建てられた。その後34年には漬物タンク小 屋(5.0 坪)が,38年にはガラス室(30坪)が建て替えられ,さらに翌年には礫耕用のファイロンガラス室が建設さ れた。昭和35年当時の建物および圃場の状況は下のとおりである。

第10表 藍住分場の職員数の変動

34

3

0

3

35

2

1

3

33

2

1

3

27

3

1

4

 $\sim$ 28

年

研究職

行政職

技能職

計

次

29

 $\sim$ 32

4

1

5

初代主任には富岡芳雄技師が就任、そのあと阿部泰典、安芸精市分場長らが他の職員と共にイチゴ芳玉およ びシロウリ阿波みどり品種の育成をはじめ、ハウスナスの落果防止対策など多くの成果をあげた。しかし、昭和 45年4月には再び試験地となった(規則第24号)。そして本場が石井町に移転,施設,圃場も拡充整備された のを機に廃止が決まり、46年8月に開設以来19年の幕を閉じた。 昭和35年当時の建物、圃場の配置図は第17図のとおりである。

**®** Φ 3 研究室 57.8m² ②作業舎 92.5m² ③温 室 66.1m<sup>2</sup> ④公 舎  $49.6m^2$ 第17図 藍住分場建物圃場配置図(昭和35年8月) 板野郡藍住町東中富 (8) 海南分場

方法,パイナッ
業事情を背景
る海部園芸研
年4月にけ町

海南郡内では、昭和24年頃から油障子によるキュウリの早出し栽培が始まり、海部郡農業振興協議会が主 体となって促成野菜栽培の振興を本格的に図り始めた。これが発端となって昭和26年に海部郡川東村大 字四方原に海部郡農業振興協議会海部園芸研究所が設立された。その後28年頃からビニール被覆栽培の 始まりと共に、冬期における県南の温暖な気候を利用した園芸作物の栽培が盛んになってきた。しかし新しい 栽培技術のため各作目の栽培上にいろいろな問題が生じてきた。すなわち、キュウリ、トマトの早出し栽培では 播種期の前進に伴う栽培法および品種の問題,海部青軸鉄砲ユリの早出し栽培における種球の自家生産の ップルの早出し栽培技術の確立など早期解決を望む声が高まりつつあった。このような地域の農 景に、生産者および関係機関の強い要望で、昭和29年4月に海部郡農業振興協議会設立によ 开究所が県に寄付され、ここに徳島県立農事試験場海部園芸試験地が開設された。そして翌30 年4月には町村合併に伴い,所在地が海南町に変わり,32年2月には農事試験場の全面的な規則改正が行 われたのに伴い,名称を海南園芸試験地と変更した。その後試験課題の増加などによって試験圃場が手狭 になり,さらに用地が借地であったことなどから43年3月に現在地(海南町多良)に新築移転し,46年4月に試 験地から分場に昇格した。現在地に移転前および後の建物,施設,圃場の状況は図示のとおりである。なお四 方原の時代から併設されていた海部普及所海南支所は,分場と共に移転し,同じ建物の中に在って研究と普 及指導が緊密に連係しながら効率を上げている。本館,作業舎ガラス室以外の現在の主要な施設はZM型 鉄骨ハウス(600㎡),鉄骨屋根型ハウス(300㎡)および育苗パイプハウス(108㎡)である。 昭和29年4月発足当時の職員は、園芸研究所の職員2名のほか主任として着任した川崎技師の3名で あった。37年には松崎技師が川崎技師と交替46年分場昇格に伴い初代分場長となったが、53年に日和佐 農業改良普及所海南支所長への転出によって、川島農業改良普及所から藤井文明技術主任が着任し、さらに 55年からは福岡省二分場長となった。 開設から現在までの職員数の変動は下のとおりで、45年以降は研究

00 第18図 海南試験地配置図(昭和35年8月)海部郡海南町四方原

員2名,技術員1名計3名であるが,33年から38年の6年間は研究員1名と言ったきびしい時代もあった。

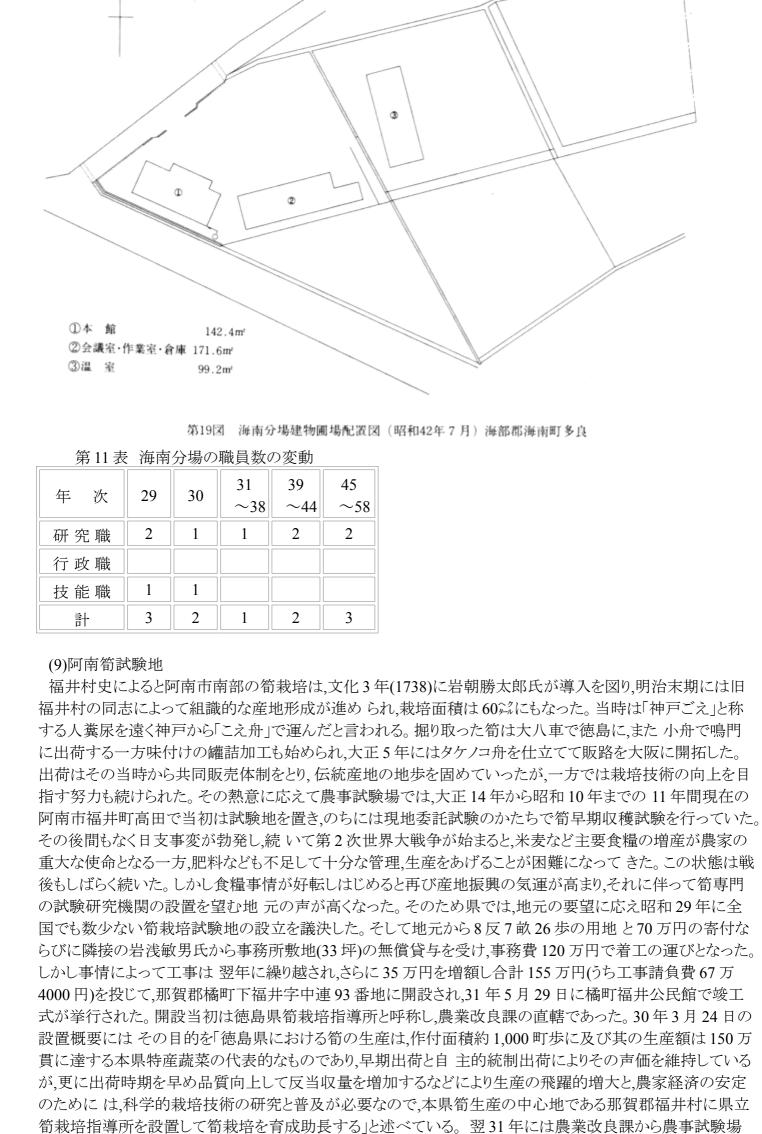
①本 館

敷地+圃場

99.1m<sup>2</sup>

33.1 m<sup>2</sup> 16.6m<sup>2</sup>

18.5 a



へ移管され,徳島県立農事試験場筍栽培試験地と呼んだ。間もなく町村合併によって所在地が福井村から橘 町となったため32年2月には橘筍試験地と名称を改め、さらに40年には阿南筍試験地と改称し現在に至っ ている。試験地の職員は、開設当初は那賀南部農業改良普及所の 庄野所長が栽培指導所長を兼務し、他に 技師および助手各1名となっていたが,実際には臨時人夫1名が管理していた。農事試験場に移管された31 年からは丸 尾包治技師が常駐し,他に技術員1名の2人で現在まで主として早期収穫技術,肥培管理方法 および障害防止対策などの試験を実施,成果をあげている。建物および圃場の配置図は前ページのとおり

事務室

第20図 阿南筍試験地建物圃場配置図(昭和30年12月)

59.5m<sup>2</sup> 19.8m<sup>t</sup>

で,現在も変わっていない。